

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこゝとばを掲載します。

言葉は、生きています。ただ口から吐き出されて、そのままじつとしているのではない。やさしい言葉をかけてやると、なごむ。また暗い、ゆううつなことを言い続けると、暗く、ゆううつな事態が起こり、明るく朗らかなことを言い続けると、明るく朗らかな事態が起こる。

ある人は、田畑の作物をほめる。「よく稔ったなあ、すばらしいぞ」と言葉をかけ、その葉や枝や身を撫でるようにして可愛がっている。彼の作物は、大変稔りがよい。「もつと、よくなれよ」彼は、生きた人間に言いかけるように、期待をかけているが、作物はそのようにすくすくと育つ。

またある人は、自分の使う機械類、道具類をいつもほめて、感謝する。「よく働いてくれるなあ。お前のおかげでこんなに仕事ができた。明日もまた頼むよ」といった具合である。この人の使うものは、なかなか故障しない。そして能率もよい。

美しいとほめる心が、その通りの言葉となって、その言葉が閉ざされている人の心を開き、美を伝える。美しいと言えば美しくなり、きたないと言えばきたなくなる。物そのものに善悪美醜があるのではなく、人間の心によってそれぞれに評価され、意味をもってくる。



7月のテーマ | 言葉の力

言葉は生きている

丸山竹秋

一度言葉に発せられたことは、必ずこの世に実現し、実際に現われるものとの考え方が、祝福をすれば、その内容の通りに将来実現するという信念となる。成績の悪い子でも、よい子だとほめ、しつけをし、可愛がっていると、よい子になる。バカな子だと、くさしてばかりいたのでは、どうしてよくなるかがあるうか。

自分の仕事はだめだだめだと言っていると、その言葉は、自分の心をも暗くさせ、周囲の人にも響いて、その言葉通りに仕事はダメになってしまう。今はダメでも将来は必ずよくなるぞと、言葉をかけてやっていると必ずよくなっていく。言葉の中にある信念が、事情を変えさせるように働きますからである。しかし信念といっても、言葉と別物ではない。言葉そのものになって表われているのである。詫びの言葉は詫びの働きをし、いたわりの言葉は愛の発露となって、動植物にまでも及ぶ。

ある百姓は、田に水が涸れていると「さぞ喉がかわいたろうなあ」と言いつつ水をやり、草をとる時は「せつかくの肥料を草にくわれてしまつて、ひもじかろうなあ」と、稲を可愛がっていたところ、反当り一俵半多くの収穫をあげたのであった。こうした実例は、まだまだ枚挙にいとまがない。

まさに言葉は生きている。言葉の通りに、自分の周囲が変わり、言葉によって自分も変わってゆくのである。さつそくその効果を、わが身に試してゆくのではないか。

『丸山竹秋選集』より